

आयुस् あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

*** 図書館と知の巨人たち ***

京都文教大学図書館長

総合社会学部・教授 (国際協力・CSR) 島 本 晴一郎

図書館はこれまで数多くの知の巨人を生んできた。その言わば図書館の「申し子」とも言うべき代表格は南方熊楠であろう。熊楠は、明治から大正、昭和にかけて現れた不世出の知の巨人である。その学問領域は粘菌、天文学や環境学などの自然科学から、漢学、宗教学、歴史学、文化人類学、民俗学、芸術など人文科学の広範な分野に及んでいるが、ただ単に学者ではなく、自然環境の保護にも全力を尽くした社会運動家でもあった。和歌山県の商家に生まれ、期待されて東京大学予備門に入ったが、中退して米国を放浪。西海岸から東海岸に大陸を横断した後、中米諸国を経て英国に辿り着いている。熊楠は、東洋西洋の枠を超えた知への探究心と、独立独歩で自分の研究分野を切り開きたいという強い欲求に駆られていたに違いない。そのような彼を受け入れたのは、知人の紹介により閲覧を許された大英博物館の閲覧室、そして南ケジントン博物館の付属図書館であった。英国の権威ある科学雑誌ネイチャーには、熊楠による30篇以上の科学論文が掲載されているが、その大部分の着想はこれら図書館の中で醸成されたものである。

もう1人、もっとわれわれに身近な図書館の「申し子」がいる。それは司馬遼太郎だ。司馬遼太郎（本名福田定一）は、洛陽の紙価を高らしめた歴史小説家である以上に、近代日本から現代までの日本社会を俯瞰した稀代の思索家でもあったと言えよう。駆け出しのころの彼は、復員したての文化・宗教記者に過ぎず、その役回りは京都の

大学・寺の取材をもっぱらにする退屈なものだった。しかし、彼はむしろ歴史に触れる京都のお寺への取材を喜んでいたふしがある。京都の支局（産経新聞）に席をおくも、西本願寺の飛雲閣で空に浮かぶ雲を眺めては日本や世界の歴史に思いを馳せ、宗教や歴史関係書物の宝庫であった本願寺の書庫や龍谷大学の大学図書館に入り浸っていたと言う。記者福田定一が作家司馬遼太郎として世に出ることとなったきっかけは、ほこり舞うこれら図書館の空間に身を置いて、悠久の時空を超えた着想を史実に照らし合わせて深掘りし、醸成させていったからに違いない。

ところで利用者にとっての図書館は、ただ単に検索対象の図書資料の在り処であるだけではない。それ以上に自分と変わらぬ同輩たちが、真剣な面持ちで読書をし、調べ物をしている姿に触発される空間でもあるのだ。言い換えれば、図書館とは物理的には図書資料によって囲まれた受動的な空間でありながら、実は、利用者の個人個人の知的営みが知的空間に向かって発信されている能動的な空間でもある。このような空間においてこそ、個人の思索や知的作業が促進され、言わば思考のシナプシスが加速度的に繋がっていくのだろう。

こうして見ると、早朝からわが京都文教大学の図書館においても、書籍に向きあう若き学生諸君のまっすぐに真剣なまなざしはまぶしい。きっと未来にかけての新たな知の巨人たちが、この若き群像の中からも出て来るかもしれないと思うのである。（しまもと せいいちろう）

❀❀❀❀ それでも、海外は楽しい！ ❀❀❀❀

臨床心理学部臨床心理学科・准教授（英米文学） 中 窪 靖

異国の地を旅するのが好きだ。そして、訪れた土地で書店に立ち寄るのを習慣としている。一番のお目当ては知っている作家の翻訳本である。気がつくと、ゆうに30分、場合によっては1時間くらいは書店の中にいる。大きな書店では、フィクションの品揃えはもちろんのこと、歴史や伝記、そして哲学・思想まで充実のラインナップで揃っている。土地の言語の“て・に・を・は”がわからないで、内容が理解できるわけがない。でも、土産を買うような気持ちで、翻訳本を数冊物色し始める。残念ながら、今回は、お目当ての作家の作品にめぐり会えなかった。

旅の醍醐味は、何とんでもその土地の食を味わえることだろう。ワインを傾けつつ、食に舌鼓を打つ。これを目的に旅に出た。自分の中で「美食の旅」と名づけた。グルメの間で、美食を味わえるとして近頃人気が出ている場所だ。

旅の出発は、まず空港に行くこと。搭乗券を受け取り、大きな荷物を預け、最後にわずらわしい手荷物検査を受ける。心づもりをしていたにもかかわらず、探知機をくぐるとき、甲高い音がして、ボディチェックを受ける羽目になる。今回は、ポケットにコインがあったせいだ。10時間ほど飛行機の中で過ごす、目的の土地に到着だ。しかしながら、まだ、気を抜くことができない。入国審査があり、ホテルに向かうための乗り物にたどり着かねばならない。初めての土地で不案内であるので、慎重に乗り場を探す。

ホテルに着きチェックインを済ませて一休みすると、ミネラルウォーターを調達に出かける。町を散策しながら、町の様子・大きさを感じ取る。うまくいくと、土地の美食が味わえそうな店が見つかることがある。

現地に着くと、土地の人とのコミュニケーションが必要になる。ものを買うときに、まずその問題に直面する。レジの数字が見えると安心だ。財

布の中の小銭を計算して、払えば終わりだ。しかし、土地の言葉で言われると困り果てる。店員と英語で対応可能な国がある一方、ホテルのような接客の場を除けば、英語での対応が難しい国もある。今回は、後者のタイプの国にやってきた。そこで、ガイドブックを片手に、土地の言葉で数字を頭に叩き込む。まずは、1から10までの数字を、さらにお金の場合は2ケタの数字も必須だ。でも、理解できないときは、紙幣を渡してお釣りをもらう。ひょっとして余分に取られているのでは、と心配しながら。

旅に出ると、思いもよらないことに遭遇するのが常だ。極端なはなし、毎日どこかに待ちうけているといっても過言ではない。日本の常識で、途中の駅で荷物を預け身軽にその町を探訪しようなどと考えるのは浅はかだと思い知らされた。コインロッカーが見つからない。駅の“案内”で、バスターミナルに“預かり所”があるとの情報を得るが、バスターミナルは離れている。その上、いつものようにガイドブックの地図が不案内だ。出会うひとに尋ねながらその場所を突き止めたときには、かれこれ1時間が経過している。予定の列車に間に合わない。それで、あえなく計画は中止となった。

でも、海外旅行はやめられない。ハラハラさせられることの裏には必ずこころが解き放たれる瞬間があるからだ。そこには、仕事の道具はない。畢竟、時間に追われる生活をしばし忘れることができる。と同時に、その土地の食とお酒、そしてその場の空気を味わうという楽しみがある。カフェで飲み物を片手にゆっくりと時を過ごしたり、ふと立ち寄ったレストランで思わぬ美味に出会ったりすると、来てよかったと思う。帰国したあとに思いだすのは、いつも、日本とは違う時間の中で見いだされたこのような場面ばかりだ。

（なかくぼ やすし）

🍎🍎🍎 私のすすめる3冊（私の推薦図書） 🍎🍎🍎

幼児教育学科・教授（児童家庭福祉・保育） 安 藤 和 彦

◎『「こどもの権利条約」絵辞典』大型本

木附千晶、福田雅章、森野さかな 著／PHP研究所

「子どもの権利条約」は正式には「児童の権利に関する条約」といいます。これは、子どもの基本的な人権を国際的に保障するために定められた条約で、1989年の第44回国連総会において採択され、1990年に発効しました。日本は、1994年に批准しました。

国連総会では、今年の11月20日に採択されて25周年を迎え、また日本では、批准されて20年目を迎えます。

この節目の年に、子どもの権利条約について、考えてみるのが大切です。この本は、当事者である子どもにもわかりやすく書かれています。

そして条約の解説だけでなく、子どもたちが困ったときにすぐに役立つようにQ&Aでも説明されています。

◎日本各地の『昔ばなし』の本

旅行をするときには、行先のガイドブックによって観光地の旧蹟を探したりあるいは、食べる楽しみや観る楽しみを求めたりして出発します。

旅先に着いてからは是非とも手に入れてもらいたいものは、その土地にしかないものです。その一つとして、“昔ばなし”をまとめた本です。

先日手にいれた本は、『五箇山の昔ばなし』『おもしろい北陸の昔話』『立山黒部の昔ばなし』ですが、このような“昔ばなし”や“民話”が各地にあります。

この本から、現代まで語り継がれている意義や意味を探ることができます。

◎『学校・園庭ビオトープ』

財団法人 日本生態系協会 編著／講談社

幼児教育・保育を実践する保育者は、冷静な頭と熱い心と暖かい手を持っていることが大切です。

なかでも、自然とともに生活するなかで、子どもが直接自然に触れる生活が子どもの成長・発達に大きな意義があり自然と共存する生活を体験することが大切です。本書では、「ビオトープ（Biotop）」とは、その地域にむかしから住むさまざまな野生の生き物が暮らすことができる自然のことで、草地や沼地、林地、砂浜、干潟などのひとかたまりの空間をさすと説明しています。

本書は学校・園庭ビオトープの考え方、つくり方、使い方を示した環境教育の手引き書でもあります。

（あんど う かずひこ）

♡♡♡♡♡ 五感をくすぐる本と図書館 ♡♡♡♡♡

食物栄養学科・准教授（栄養教育） 森

美奈子

一昨年、新しいものの好きの私は、電子書籍を試してみたくて早速購入した。紙の書籍に比べると入手が簡単で、速く読めたし、老眼の近頃、拡大しながら読める電子書籍はとても便利であった。嬉しくて、かつて文学少女だった頃に読みふけた著作権が切れて無料で配布されている太宰や漱石、鴎外など往年の名作文学作品もどんどんダウンロードした。しかし、何かが違う…。いつも読書の度に印刷された文字の向こう側に広がる空想の世界が、なかなかイメージ出来ない。そこで、五感が一つの原因かもしれないとはたと気がついた。新作の単行本を手にした時、新しい紙とインクの匂いや紙の質感、帯のメッセージ、挿絵や扉を開くときのワクワクした気持ち…。残念ながら電子書籍では味わう事はできない。同じように、私は図書館の空気感と匂いも大好きだ。扉を開けて、奥に進むにつれて広がる静謐な空間が広がり、どこかしら凜とした雰囲気が漂っている。書架の間を進めば、並んだ本達が放つ独特の空有感と匂い。この中からお気に入りの本と出会うかもしれないという胸の高揚感。きっとそこには、紙の書籍だけが持っている五感をくすぐる何かがあるのだろう。本学に初めて赴任した時に、しばらくしてなんていつも美味しそうな香りがするキャンパスだろうと思った。しばらくして、それはすぐ近くにある製パン工場から流れてくるパンの香りだと気がついた。最近では、今日はたくさんのメロンパンを作っているな？今日はチョココルネだな？と勝手に妄想している。数年前、ここの工場でアルバイトをしているゼミの学生から、とても感動する話を聞いた。彼女は、チョココルネのチョコクリームを詰めるラインの仕事を任されたそうだが、少し慣れてくると、延々と続く単純作業がとても辛くなってきたそうだ。その時、今自分が詰めているチョココルネを食べている人は、どんな人達なんだろう？どんな気持ちでどんな顔をして、それを食べるんだろうと空想をしてみると、不思議と作業が楽しくなり、チョコクリームを詰めるときに、このパンを食べる人がきっと笑顔になりますようにという思いを込めながら作業をすると、その仕事はたいそうやりがいのある作

業に変わっていったそうである。そして、そのアルバイトを辞めるときに、ラインの責任者の方にそのことを話すと、ものすごく感謝をされ、「あなたのような気持ちで仕事をしてくれた方に会えたことが私の宝物です。」と言われたそうである。本も食べ物もそれを作った人の思いが込められている点では同じである。きっと、一冊の本が出来上がるまでに、どれだけの方の思いがそこに込められているのであろうか？作家、編集者、装丁デザイナー、印刷所の方など…。私は今年、編者としてテキストの編集に関わった。発刊に至るまでに膨大な道のりを出版者の編集者の方とやり取りをした。印刷されて手元に届いた時、真っ先にその匂いと感触を確かめ、いとし我が子のように抱きしめた。私は、食べることに飽くなき関心と興味が有り、今の職業を選んだが、自分の一番好きなことに長年関わる事が出来ていることに今更ながら幸せを噛み締めている。生きることは食べること、食べることは人にとっての喜び、学生には、栄養士は食を通じて人々の喜びに関われる素晴らしい職業だよと耳にタコができるほど呟いているが、様々な小説からも私は食の喜びを味あわせてもらっている。村上春樹や吉本バナナに登場するメニューは、作家の卓越した表現力で書かれ、私の美味しい妄想を限りなく掻き立てる。食堂かたつむりに出てくるしあわせレシピは、まるで自分も一緒に作っているかのような妄想に陥り、料理が完成した時の達成感まで一緒に体験できる。脳内には美味しい香りまでも充滿している。紙の本が放つ匂いは、いつしか私の妄想エッセンスで、美味しい香りに変換されている。紙に印刷された文字がくり広げる世界観は、どんなにIT化が進んでも、絶対に代替化ができない世界である。二次元の世界だからこそ広がる空想の世界観、若い学生さんには招待したい。図書館にも本にも空想という美味しい世界がありますよ。

（もり みなこ）

「あーゆす」のサンスクリット語をより正確な表記に訂正しました。